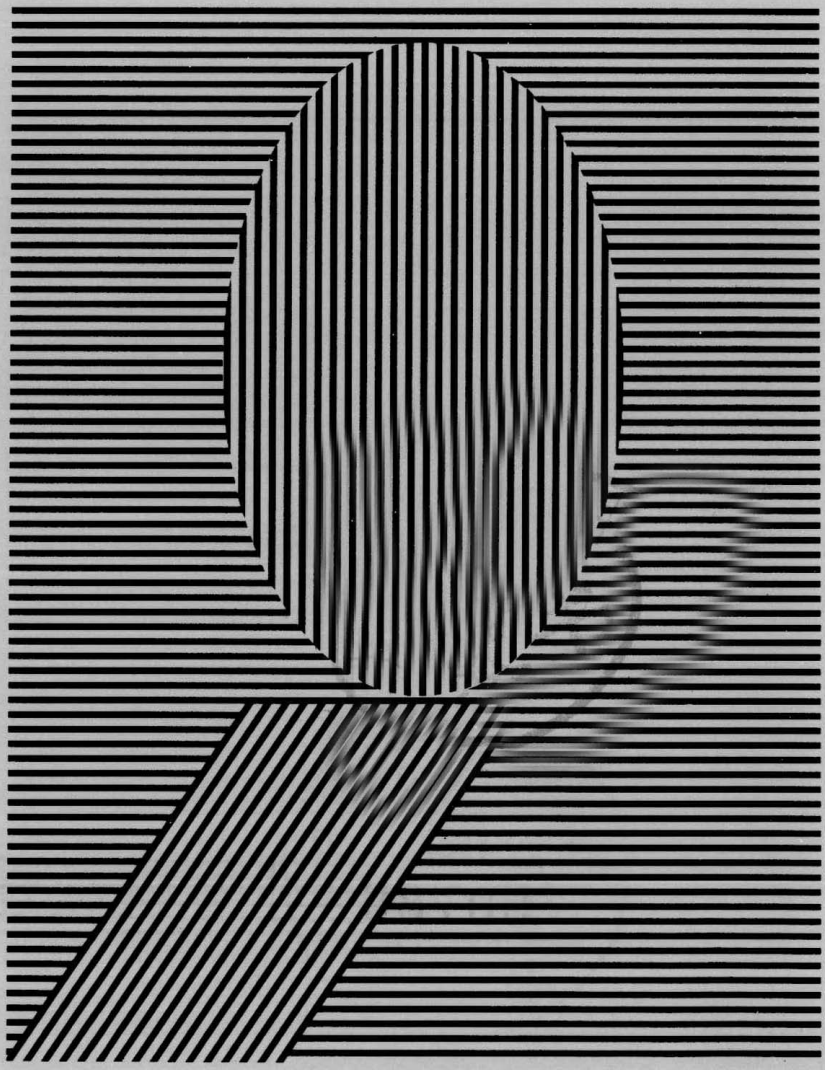
コロンブスの卵

丸谷才一

コロンブスの卵

丸谷才一



筑摩書房

コロンブスの卵

1979年6月30日初版第1刷発行
1979年7月20日初版第2刷発行

著者　丸谷才一

発行者　関根栄郷

発行所　株式会社筑摩書房

東京都千代田区神田小川町2—8
電話291-7651営業 294-6711編集
振替東京6-4123
組版井村印刷 印刷多田印刷 製本鈴木製本

©丸谷才一1979 printed in Japan
0090-81114-4604

装釘　奥野玲子

コロンブスの卵　目次

I 歴史
徴兵忌避者としての夏目漱石 9
歴史といふ悪夢 54

II 詩
ハムレットの小唄 77

III 批評
退屈を教へよう 127
黒い鞄 139
詩学秘伝 152

IV 小説
夜半の狭衣 159

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

四畳半襖の下張裁判 171
1 起訴状に対する意見 171
2 弁論要旨 213
通夜へゆく道 248
一双の屏風のやうに 307
女の小説 320
問はず語り 332
維子の兄 342
あとがき 361
初出一覧 363

コロンブスの卵

I

歴史

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

徴兵忌避者としての夏目漱石

私の罪は、――もしそれを罪と云ひ得るならば、――

夏目漱石『硝子戸の中』

1

夏目漱石の『こゝろ』はぼくにとつて長いあひだ謎めいた本であつた。子供のころはじめて読んだときも、大人になつてから再三読み返したときも、妙に納得がゆかなかつたのである。もちろん漱石の作品はたいていの場合、謎めいた気配を漂はせてゐる。輪廓のくつきりした達意の文章と堅固な構成とのせいで形づくられる明快さのすぐ裏に、どうにもわけの判らぬ曖昧なものが無気味にひそんでゐて、その明快さと曖昧さの対立や衝突の織りなす模様が彼の作品の本当の魅惑ではないかと思はれるくらゐだ。さういふ趣は、世間で判りやすい小説だと見なされてゐる『坊つちやん』や『三四郎』にもやはりある。けれども普通の作品の場合には、難解さはいはば

全体に薄く撒かれてゐて、さほど目立たないため、かへつて効果をあげることに寄与してゐる。ところが『こゝろ』の場合、事情はまつたく違つて、重要な一箇所がはなはだしく曖昧なため、狐につままれたやうな気持になるのだ。すくなくともぼくにとつては常にさうであつた。

その重要な一箇所とは言ふまでもなく「先生」の自殺である。「先生」が、友人と恋を争つて彼を裏切り、死に至らしめたといふ青春の罪を悔みつづけたあげく、つひに自殺する。そのことはいちおう判らぬでもない。判るやうな気がすると言つてもいい。しかし「先生」を自殺へと踏み切らせる契機になるものがあの乃木大将の殉死であることは、どうしても合点がゆかなかつた。それが文学的放れ業の妙だとあつさり感嘆してしまへばそれまでだが、ここには大変な飛躍があると感じられたのである。事実『こゝろ』はこのくだりになると、それまでの精細な描写の積み重ねから、とつぜん、大まかでぶつきら棒な叙述へと移つてしまふ。もちろんこの部分は「先生」の遺書によつて物語られてゐるから、死を間近に控へた者の文章に精疎の乱れがあるのは当然といふ言ひわけは、ただちに思ひつくことだ。しかしぼくは、自分じしんに対してさういふ反論を試みながらも、内心こんなことを考へざるを得ないのである。——ひよつとすると漱石は、このくだりを書きながら、自分でもその遁辞によりかかつてゐたのではないか。さう言つて逃げを打てることを、心のなかで喜んでゐたのではないか。

だが、ここで断つておかなければならない。この作品の末尾に対する（そして結局はこの作品に対する）長いあひだの疑惑を、時間的経過を説明しながらうまくまとめることは、どうやら手

に余るやうだ。中学生であるぼくが極めておぼろげに感じ、旧制高校生であるぼく、大学生であるぼくが、それよりはすこしはつきりした形でいだいた不審を、今の自分の言葉でなぞりながら、しかも同時に現在のぼくの意見を言ひ添へるといふ操作は、どうにも複雑すぎるのである。ここでは話がこぐらからないやう、さういふ時間的な要素はなるべく捨てることにしよう。

と、さう言つたあとでたちまち思ひ出に耽る形になるが、ぼくははじめて『こゝろ』を読んだときも、再読三読した際も、そして今度、この文章を書くために読み直したときも、終り近くにある、

……私はとう〳〵自殺する決心をしたのです。私に乃木さんの死んだ理由が能く解らないやうに、貴方にも私の自殺する訳が明らかに呑み込めないかも知れませんが、もし左右だとすると、それは時勢の推移から来る人間の相違だから仕方がありません。或は箇人の有つて生れた性格の相違と云つた方が確かも知れません。

といふ言葉づかひに、何か素直に受取れないもの、何か言ひわけじみた口ぶりを感じてゐた。その気持をもうすこし敷衍すれば、漱石が自分じしんこの部分での説得力の乏しさを自覚した上で、それを逆用しようとしてゐる気配、といふことにならうか。もちろんこれは、枯尾花を見て幽霊と思ふたぐひの、心の迷ひにすぎないと言はれるかもしれぬ。しかしそれならばいつそ笑はれついでに言ひ添へるのだが、『明暗』執筆中の漱石が、避暑地にゐる芥川龍之介・久米正雄にあて

た手紙で、

私はこんな長い手紙をたゞ書くのです。永い日が何時迄もつづいて何うしても日が暮れないといふ証拠に書くのです。さういふ心持の中に入つてゐる自分を君等に紹介する為に書くのです。夫からさういふ心持でゐる事を自分で味つて見るために書くのです。日は永いのです。四方は蟬の声で埋つてゐます。

と書いてゐるのは、ぼくに一種の衝撃を与へる。この手紙、殊にこの部分の、なつかしくて寂しい風情と、「先生」の遺書の先程引用したくだりの、何か相手を突つぱなしたやうな、寄せつけまいとしてゐるやうな気配との対比に驚くからである。もちろん『こゝろ』のころの漱石と『明暗』のころの彼とは違ふだらう。ぼくはそのことを認めない者ではない。そして『こゝろ』の「先生」が現実の漱石その人ではないとぼくが知つてゐることは、改めて断るまでもない。ただぼくとしては、芥川や久米に対する漱石のやうな優しさで、『こゝろ』の「先生」が彼のたつた一人の弟子に対し、委曲を盡した遺書を書いてくれたならどんなによかつたらうと惜しんでゐるのだ。東京で『明暗』を書き進めてゐる漱石は、一の宮で遊んでゐる弟子たちに、「時勢の推移から来る人間の相違」とか「箇人の有つて生れた性格の相違」とかを振りかざして垣を作る態度の、まさしく正反対の態度で臨んでゐた。

そして、張りめぐらした垣根を一言で要約すればあの有名な「明治の精神」となるだらうし、乃木大将こそは、その具体的なイメージであるに相違ない。

すると夏の暑い盛りに明治天皇が崩御になりました。其時私は明治の精神が天皇に始まつて天皇に終つたやうな気がしました。最も強く明治の影響を受けた私どもが、其後に生き残つてゐるのは必竟時勢遅れだといふ感じが烈しく私の胸を打ちました。私は明白さまに妻にさう云ひました。妻は笑つて取り合ひませんでしたが、何を思つたものか、突然私に、では殉死でもしたら可からうと調戯ひました。

私は殉死といふ言葉を殆ど忘れてゐました。平生使ふ必要のない字だから、記憶の底に沈んだ儘、腐れかけてゐたものと見えます。妻の笑談を聞いて始めてそれを思ひ出した時、私は妻に向つてもし自分が殉死するならば、明治の精神に殉死する積だと答へました。私の答も無論笑談に過ぎなかつたのですが、私は其時何だか古い不要な言葉に新らしい意義を盛り得たやうな心持がしたのです。

それから約一ヶ月程経ちました。御大葬の夜私は何時もの通り書斎に坐つて、相図の号砲を聞きました。私にはそれが明治が永久に去つた報知の如く聞こえました。後で考へると、それが乃木大将の永久に去つた報知にもなつてゐたのです。私は号外を手にして、思はず妻に殉死だ〳〵と云ひました。

けれども、ここでどうしても言ひ落してはならないことが一つある。それはぼくの子供のころからの軍人嫌ひ、乃木大将嫌ひである。そのことについて分析的に語ることはむづかしい。ただぼくは幼いうちから武張つたことが嫌ひであつた、と言つてしまふのがいちばん正しいかもしれない。そしてぼくの育つた城下町の町医者の家の雰囲気は、さういふ性癖を黙認してくれたし、あるいは、父を含めて家族の者がみな、戦争と軍人とが嫌ひであつた。さうまでは言はないにしても、「兵隊に取られる」ことを人生最大の不幸の一つと見なしてゐた。やや長じて文学書に親しむやうになると、ぼくのこのやうな傾向はますますはなはだしくなつたし、軍国的な風潮への反撥といふ条件がこれに拍車をかけたことは言ふまでもない。一世代前の文学好きの若者が、家と父への反抗を夢みながら生きたとすれば、ぼくの少年期の主題は国家と軍隊への拒絶、虚しい拒絶であつたやうに思ふ。なかんづく、職業軍人といふ存在はぼくにとつて最も厭はしいものであつた。そして明治以後の日本において、軍人の代表が東郷元帥でも児玉源太郎でもなく乃木大将であつたといふ事情を説明してくれるものとしては、司馬遼太郎の興味津々たる著作がある。

司馬のその『殉死』が発表されたとき、批評家たちはしきりに芥川龍之介の『将軍』との対比を試みた。ぼくが芥川の『将軍』を読んだのはたしか中学の一年生のときのはずだが、この乃木大将の戯画に文学的感銘はほとんど受けなかつたやうに記憶してゐる。当時のぼくにとつて、それはあまりにも常識的な（しかし決して公言してはならない！）乃木大将の肖像にすぎず、作品

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com